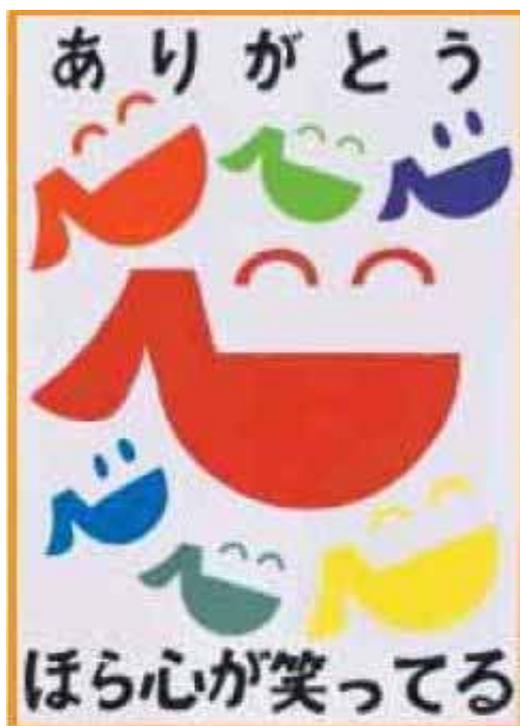


2009年度

人権作品集



（「人権」に関するポスター（図画）選定作品 小学生の部 6年生）



（「人権」に関するポスター（図画）選定作品 中学生の部 3年生）

はじめに

名張市・名張市教育委員会では、日常の家庭生活、学校生活、社会生活などでの体験を通して、人権を守ることの重要性や、部落差別をはじめ、あらゆる差別をなくすための意見を市民のみならずから募集しています。

本年度も、小・中学校の児童生徒をはじめ、高校生・一般のみなさんから、「人権」に関する作文・標語・ポスター（図画）・フォト（写真）を合わせて六六五点もの応募をいただきました。

全体を通して見てみると、自分たちの身近な問題や、さまざまな体験を通して、人権の大切さをとらえ、自分たちの生活の中で差別をなくしていく行動に移していこうとする気持ちが見られています。日ごろの学校、地域等での人権・同和教育の取り組みの成果だと喜んでいきます。

この作品集には、応募いただいた作品の中から、作文二点、標語一七点、フォト（写真）三点を掲載しました。

作文・標語は、様々な学習や日ごろの自分自身の体験を通して、差別の現実に触れ、その中から差別をなくすために、自分の問題として自分がどう行動すべきかなどが率直に表現されているものが多く見られました。

なお、ポスター（図画）については、二作品を啓発用のポスター及びティッシュとして活用し、標語については、二作品を啓発用ティッシュに活用します。

この作品集を通して、人権について考えていただいたり、差別に対する見方や考え方などを知っていただくとともに、さまざまな学習の場でご活用いただき、人権意識の高揚と人権・同和教育の一日も早い解決に向けて、一層ご尽力いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、作文・標語・ポスター（図画）・フォト（写真）の応募にご協力をいただきました皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

目次

作文

小学生の部

ふわふわことばのキャッチボール

(二年生) 4

ありがとうのことば

(二年生) 5

見て見ぬふりをしないゆう気

(三年生) 6

友だち

(三年生) 7

だいちゃん

(五年生) 8

人の大切さ

(六年生) 9

友だちだから

(六年生) 10

勇気を出して

(六年生) 11

中学生の部

ふわふわことばのキャッチボール

(小学二年生)

わたしには、たくさんのお友だちがいます。みんなやさしくて、いいお友だちですが、今までに、けんかしたり、もめことがあったりしたことがあります。

わたしたち二年生は、クラスがえがなかったので、一年生のときと同じお友だちと、へんきようしたりあそんだりしています。

一年生のときのことです。わたしとお友だちが、おしゃべりをしていたら、べつのお友だちが、きゆうにそばへきて、

「いっしょにあそぼう。」

と言って、わたしがおしゃべりをしていたお友だちをつれていってしまいました。わたしは、わりこみをされたみたいで、くやしくなりました。そのとき、

「まだ、おしゃべりのとちゆうだから、まって。」

と言いたかったけど、言えませんでした。

また、お友だちと会い合いになって、わる口を言われてないことがありません。そのとき、

「わる口を言うって、いじめだね。」

とあやまってくれたから、

「わたしも、言いかえていじめだね。」

とへんきをしました。すると、かなしい気持ちもきえて、うれしい気持ちになりました。やさしいことばは、かなしい気持ちも明るくしてくれて、いい気持ちもかえられるパワーがあるんだと思いました。

一年生のときから、「自分の気持ちをお友だちにことばで言う。」「ちくちくことばではなく、ふわふわことばをつかう。」「みんなでやくそくしていました。二年生になってもそのことをたいせつにしています。」

わたしたちのクラスのもくひょうの一つは、「やさしいつばいのクラスにしよう。」です。一学年には、けんかがありました。だんだんなくなってきました。きつい言い方をしていた人も、やさしく言うようになるようになってきました。

それは、けんかをしたあとに、なぜはらが立ったのか、何がイヤだったのかを何でも話し合ったからだと思います。自分のことだけでなく、お友だちが何を言いたいのか考えながら聞いたら、お友だちの気持ちもよくわかります。すると、やさしく言えるようになります。

ふわふわことばをお友だちに言ったら、またふわふわことばがかえってきます。それは、やさしい気持ちのキャッチボールみたいです。

けんかをして、話し合いをしたら、なかなかおりをしまえよりもうとなかよになれると思います。話すときには、ふわふわことばをつかいたいです。これからは、わたしたちのクラスを、ふわふわことばでいっぱいにしていきます。

そして、にしきお小学校を、ふわふわことばでいっぱいにするために、全校のみんなで、ふわふわことばのキャッチボールをしたいと思います。

見て見ぬふりをしないゆづ気

(小学三年生)

わたしが一年の時のことです。わたしは、自分の名前の悪口を言われて、すごく悲しかったことがあります。わたしは、その悪口に

「そんな言わんといて。」

と言つて、その子はよけいにおもしろがつて言ってきたので、とつとつわたしは、ないてしまいました。それをみていたAちゃんは、

「そんな言つたらだめやる。やめやなあかんで。」

と強くいつてくれたので、その子は悪口をやめてくれました。わたしはその言葉がともうれしかったです。

でも、また次の日になるとその子は、また言ってきたので、とてもいやな気分が家に帰りました。家で、わたしは、パパとママに、

「こんな名前つけてくれへんかったら、悪口を言われへんかったのに。」

と言つてしまいました。パパとママは、こまった顔で

「ほんだら、このことを先生にそうだんしてしらん。」

と言いました。

次の日、先生に悪口のことを話したら、

「心がきれいになるポストへ入れたら、心がスッキリするんちゃうか。」

と言つてくれました。そして、そのポストに悪口のことを入れたら、へんじがかえつてきました。そこには、

「みんなにそうだんしてしらん。きつといいことがあるよ。」

と書いてありました。それを見てわたしは、ゆづ気を出して、みんなの前で悪口の話をしました。すると、Aちゃんだけでなく、みんな

「名前は、とつてもだいいやで。」

「そんな悪口はいつたらあかんやる。」

「言つた人は、あやまつた方がいい。」

と言つてくれました。それを聞いていた悪口を言っていた子も、ちゃんとあやまつてくれました。先生は、

「みゆちゃんも心がスッキリしたと思つけど言つた人も心がすっきりしたと思つよ。」

と言いました。その時わたしは、名前のことで親に文くを言つたことを反省していました。

今、わたしは三年生です。わたしのクラスは、みんな元気で明るいです。たまに、悪口があつたりすると、見て見ぬふりをしないでみんなが注意し合つようにしています。だから、うちのクラスはえ顔が多いのだと思います。

今のわたしの目ひようは、Aちゃんのように、まわりの人や自分をだいにすることです。それは、わたしの名前が、

「心が美しく優しい人になってほしい。」

と言つたパパとママのねがいで付けられたからでもありません。この美優と言つた名前を大事にして、おかしいことをなくすなまをふやしていきたくて思っています。おかしいことがあつたら見て見ぬふりをしないゆづ気をみんなに広めていきたいです。そして、みんながえ顔いっぱいにしていきたいです。

友だち

(小学三年生)

わたしは、友だちといっしょに悪口をいってしまいます。いつも A さんがいない時にかけて悪口を言うてはいけないと思っっているのに友だちといっしょに言ってしまいます。わたしは、悪口は言ったらダメだから、なるべく言わないようにしているけど、いっしょに友だちがいるといっしょに悪口を言ってしまいます。

でも、まだかいつは、していません。言わないようにしよう！と思っっているのになぜか言ってしまいます。

でも A さんが気づいていると知っています。いっしょにべり終って A さんの方を見ると、わたしたちの方を見て、にらんでいるように見えています。それでわたしたちもまた悪口を言っつけてしまっっているのかもいけません。でも、もし同じように自分が悪口を言われていると知ったら、すく悲しくて立ちなおれません。でも、すくくなかのいい友だちだから、

「そんな事言わんときやー!。」
とか言って止めることはできません。本当は、なかのいい友だちだから、そまがっていることはまぢがえていると言えないといけないと思っつけねど、わたしはどつすねばいいかわかりません。でも、きゅう會の時もわたしが、
「おかわりするの早っ。」

ていったら友だちが、
「A さんは体が大きいからやっ!。」

と言って、わたしはいけないと思っていたけど、
「言わんとき。」

とは言えませんでした。ほかにもこんなこともありました。そつじの時に友だちがわたしのうづつを見て、

「あつそついえば A さんつめてめつちや足の横は広いねんで。」
とわたしを A さんのところへ連れていき、

「見てみい?。」

と言いました。わたしもそれを見て、

「広っ。」

と言ってしまいました。でもその言葉を言ったしゅんかん、

「あつダメだ!。」

と心の中で思いました。こんな事を言われていると A さんのお母さんたちが知ったらどつ思うだろう? もしそれがわたしたたら、わたしのお母さんはどつても悲しむと思っいます。

どつしたら友だちに言えるだろう? ..

でもこれからはいっしょに悪口を言わないようにして友だちに、

「本人が知ったら悲しむよ。」

と言っる自分になりたいです。わたしは、今までの事を A さんにあやまるっと思っいます。

だいちゃん

(小学五年生)

わたしには、だいちゃんといつ六才のしょうがいのあるいところがあります。もう一年生なのですが、言葉をしゃべりません。でも、言葉をしゃべらなくても、わたしが言っていることがわかるのです。おこった時は、泣きそうな顔をするし、わたしが笑つと、だいちゃんも笑います。だから、言葉が通じなくても、わたしが言っていることがわかるといつことは、とつてもすごいことだと思います。だいちゃんは、しょうがいのある子が通う学校に行っています。だいちゃんは、その場で、できるよつになつたことがたくさんあります。言葉をしゃべることができなかっただいちゃんか、

「だいちゃん」と言つて、手を上げて返事をしてくれるよつになりました。しょうがいのない人たちにとっては、返事をすることへぐらいかん単だと思ひますが、しょうがいのあるだいちゃんにとっては、とつてもむずかしいことだと思ひます。ほかに、鉄ぼうにぶらさがれるよつになったり、お礼ができるよつになりました。これからも、みんなよりも、速度はおそいかもしれないけれど、だいちゃんなりに、少しずつ成長していつてくれたらいいなと思ひました。だいちゃんには、みんなにいつぱいといところがあります。それなのに、ほかの人たちは見ただけで決めつけて、いやなことを言つたり、へんな目で見えます。だから、しょうがいのあるだいちゃんも、みんなにいつぱいといことができるんだといつことをみんなに知つてもらいたかつたのです。

みんなは、しょうがいのある子を見て、どう思ひますか。わたしは「できないことがあつてもいい。できなくてもだいちゃんだ。ありのままのだいちゃんといつ。」

と思ひます。みんなは、そう思ひますか。たぶん、そう思ひない人もい

と思ひます。でも、いやなことを言つたり、へんな目で見たりしないでください。差別があると、わたしのいところのよつな、しょうがいのある人たちが悲しむと思ひます。だからわたしは、差別をなくしたいと思ひました。差別をなくせば、みんなが笑顔になると思ひます。わたしのいところは、へんな目で見られても、まだわからないと思ひつけど、それを見ていたわたしは、すごくいやな気持ちになりました。みんなも、知らない人たちが、へんな目でじろじろ見てきたら、いやだと思ひます。

わたしは、しょうがいのある人だつて、いやなことばかりではないと思ひます。わたしのいところだつて、学校にいけば、みんなの人気者です。みんなか、

「だいちゃん、だいちゃん。」

と言われています。わたしのいところは、言葉をしゃべらないけれど、いところすといところがいっぱいあるので、学校みんなは、だいちゃんのこと仲よく過ぐせるのかなと思ひます。わたしだつて、だいちゃんのこと大好きです。いところだからといつ意味ではなく、ほんよつに大好きです。いところもわるいところもあります。でも、わたしをしたつてくれていて、まるで弟のよつです。わたしは、お兄ちゃんだけで、弟や妹がいないので、すこすこうれしいです。

だいちゃんには、できないことが、まだたくさんあります。いつか、だいちゃんが大きくなつて、一人でごはんが食へられるよつになつたり、しゃべれるよつになつたり、いろいろなことができるよつになるまで、だいちゃんをささえていきたいです。みんなよりは、おそいけど、だいちゃんなら、いつとできると思ひます。いつか、差別がなくなつて、だいちゃんかしゃべれるよつになつたときは、いろんなお話をしたいと思ひます。いつになるかはわからないけど、わたしは、だいちゃんといろんなお話ができるのが、楽しみです。

人の大切さ

(小学六年生)

私は今まで差別しているところを見て見ぬふりをしてしまつておりました。理科の授業で「ソーラーカー」を作っているとき

「何でできひんの。」

「バカじゃないん。」

と言われている子がいました。私はいけないことと思いつつも、正しいことを言えない自分がいました。「相手のことだから」とか「自分には関係ない」とか自分に言い聞かせてしまつていました。でも本当は注意したいのに周りの目が怖くて注意できませんでした。

あと、障がいがある人をつめたい目で見てしまつていました。障がいがある人だから何も出来ない人と勝手に決めつけてしまいました。障がいがあるからといって差別してはいけないのに、一人ひとりに大切な個性があるのに、勝手に決めつけていました。それは、まちがったものさしを自分で勝手につくっていました。

私は道徳の時間に、「三月三日の風」のビデオを見て、今までいけないことをしていたことが分かりました。その地域に住んでいるだけで差別することは本当にひどいことだと思いました。ビデオの中で部落に住んでいるだけで、他の地域の人や、学校の先生にまでいじめられるのは、おかしいと思います。それはまちがったものさしであっていると思います。

清原隆宣さんの話を聞いて、自分がされていやなことはいらないようにします。もし、自分がされる側だったらと考えるようにします。逆に自分がしてもらつてうれしかったことはいきたいと思います。

清原さんの話の中で、「人間は尊敬するべきものである」という言葉が心に残りました。「あるがままにみとめる」と「できようが、できまいが

そのまま」という意味です。私はその言葉を常に頭にいれていきたいです。

明治時代の差別は、差別するものではなくされるほうが悪いといつていたそうです。それは絶対にいけないことだと思います。差別は差別している側にはわからないけど、されている側は、とつてもつらかったと思います。それに立ち向かつていく姿から、勇気が感じられました。仲間と力を合わせ、団結すれば必ずいい結果が生まれ、絆が深まると思つから、私もいろんな事に挑戦していきたいです。

清原さんの話の中で自分を好きになるといふ話もありました。自分のかわりはだれもないといふことです。その話を聞いて自分を大切にすることとは、とつても大事なことが分かりました。だから、これから自分を好きになろうと思います。

水平社宣言や、「三月三日の風」など人権学習をして思つたことは勇気の大切さです。あと絶対に差別をしません。「三月三日の風」を見て差別がどんなにつらいかが分かりました。だからこれから差別をしているところを見たら、こわがらずに胸を張つてまちがっているといふことを言いたいです。今までの自分は、まちがったものさしで人を見てしまつておりました。人権の学習をしたから、まちがっていたということが分かりました。

人はみんな同じなんです。特別な人は一人もいません。なぜなら、みんな平等の権利を持っているからです。清原さんはすごい勇気を持っていました。本当によくするために最大の勇気を出していました。最初に書いたように私も困っている友だちがいたら、見て見ぬふりをするのではなく、勇気を出してきついで言っている子に対して、「やめなよ」と言いたいです。勇気の大切さを学んだので、これからそんな勇気を出して、差別に立ち向かつていきたいです。そして、新しいものの見方でいろんな人に接していきたいです。

友だちだから

(小学六年生)

Aちゃんは、私が四年のときからずっと同じクラスです。Aちゃんのいところはずっとたくさんあります。まず、けがやかぜをひいた時、一番に心配してくれるし、いつもニコニコしているし、かがやきで、すぐがんばっているところです。他にも小さなことで、たくさんあります。Aちゃんには、私の大切な友だちです。でも、Aちゃんは人がいやなことをやってしまったら、「そんなことしてない」と言ったりします。だけど、最後は、きちんと謝るし、時には反省して泣いてしまったりするくらい本当はいい友だちです。

それなのに、Aちゃんにいやな言葉を言ったり、暴力をしたり、Aちゃんがくれたメモや「ホルダー」をさわらなかつたり、「返してこい」と言ったりするBくんは、自分もAちゃんもすごくいやな思いでした。でも、「いや」と私から強く言えなくて、本当は言いたいのに言えない自分はいやです。それに、Aちゃんがいやな事をされている時、はつきり言えなくて、私はAちゃんの心がボロボロになるのではと不安でした。でも、言い返せないのは、正直Bくんだから仕方ないと少しあきらめている自分がいました。

そんな自分を変えたきっかけがありました。それは、「ハンセン病」の勉強で小川さんに話を聞いたことです。なぜ差別しなくちゃならなかったのか、なぜかく離されたりふるさとに帰れないのかなど、たくさん「なぜ」がありました。たった一人でも「差別はいけない」と言える人がいなかったのかなど考えました。一人でもそういう人がいれば、二人、三人、四人・・・と最後は全員が差別をやめられたのではと思うと、本当に悲しかったです。でも、私は話を聞いて差別した人たちに腹が立つたけど、自分も見つめふりをしているのだから、差別した人たちといっしょだと気が

づきました。小川さんは、ハンセン病の差別について全く知らなかった私たちに、テレビの報道を通じて知らせて、差別をなくそうとしています。差別された人を支える活動もしています。小川さんと出会って、私も「自分が変わろう」と思いました。Bくんは言つと何か自分が言われてしまいかもと思ってAちゃんへのことを見過ごしていたけど、Bくんも私の友だちだし、ちゃんと考えてみれば「わくわくのだから、伝えていこう」と思います。

そして、「人権ボスタ」でも「自分は、変わる」と表したかったので、「ちがいがあから、『私』でいられる」という言葉にしました。みんな、ちがうのだし、同じ人なんていないのだときちんと分かれば、きずつくようなこともないし、きずつける人もいなくなつて、仲よくなれると思います。クラスみんなでもAちゃんのことを考え合いました。私も正直、話し合えたことはすごくうれしかったです。

みんなで出しあつた、たくさん意見は、私にとつてもみんなにとつても大きな一歩だつたと思います。それに、今までの事をふり返つてみるとダメだつた事が、みんな一人ひとりにあつて、それがわかつて私は良かったと思えました。

私は、自分をふり返つて、「みんな一人ひとり、思っていたことがあつたんだ。ひとりじゃあなかつた」とうれしかったです。私も、自分の悩んでいることが言えてよかったです。

話し合いの後、Bくんは悪口を言つていません。みんなも、Aちゃんに声をかけることが増えてきています。クラスが、変わるうとしていようと感じます。私も、少しでも気持ちが変わりあえるように今まで以上に話をしたいです。

みんなが笑顔で卒業できるよう、明るく楽しいクラスが、今よりもっともつとつながっていききたいです。

勇気を出して

(小学六年生)

私は人によって時々態度をかえてしまつてことがあります。算数の時間に友達を勉強を教える時にも、ほかの友達には教えてもAさんには教えないということがあります。Aさんは、自分からは教えてとあまり言わず、教えてもなかなか理解してくれませんが、だから私はAさんに教えることがめんどくさいと思つていました。

Aさんは時々、ほかの男子にもからかわれています。勉強が苦手でおそいことを笑われていることもあります。私は、それを見て見ぬふりをしていることもありました。そして私もほかの男子と同じように、心の中ではAさんをからかっています。

私は、社会見学で、西光寺の清原さんの話を聞きました。清原さんは「長さはかるものさしは、きかくがあるからみんないっしょ。でも、人の値うちをはかるものさしは、人が自分に都合の良いようにそれぞれ勝手に使う。だから差別が起る。」

と教えてくれました。私は、そのまちがったものさしを使つてしまつていたのだと思いました。Aさんは、勉強が苦手かもしれませんが、でも、人の悪口は絶対に言わないし、一年生にも優しく声をかけています。Aさんには良いところがたくさんあります。でも、私や周りの子たちは、Aさんの苦手なところだけを見ていたと思います。苦手なところも良いところも、まるごとAさんの個性です。その個性をあるがままに認めていかなければならないと清原さんは言いました。

Aさんの立場に立つて考えてみると、自分がからかわれたりわからなくて

困ったりしているときに、だれも助けてくれなかったらとてもいやだと思いました。でも私は、その時は、めんどくさ、自分がからかわれたらいやだと思つていたので。

清原さんの話を聞いて、見て見ぬふりも人をきずつけ、差別をしていることといっしょだということがわかりました。だから、私はAさんがからかわれていたなら、勇気を出してその子たちに、やめるように言つていきたいです。これが、自分のまちがったものさしをなおすことになると思います。

でも、これは、私一人の問題ではありません。周りの子にも変わつていってもらいたいです。私と同じ思いをもっている子もいると思います。その子達に声をかけて、いっしょになつて注意する人を増やしたいです。

また、清原さんは

「自分がされていやなことはしない。自分のいやなことは人もいや。でも、自分がされてうれしかったことは人もうれしい。」

と書いていました。だから、みんなが笑顔になるために、自分がされてうれしかったことはたくさん人にしていきたいです。

私の経験値

(中学二年生)

私は中学一年の時、クラスの人から嫌われていました。毎日、毎日、泣くことも、相談することもできませんでした。クラスに入るのもしだいに恐くなり、話す回数が一つ、また一つと減っていききました。今になっても、時々思い出してしまいます。大げさかもしれませんが、嫌がらせ、いじめというのは、行動も、発言も、全てをうばっていくような感覚を頭に焼きつけられるものなんだと、私は思いました。

私の性格は、表では強がっているのに、裏では泣き虫になります。裏では助けて、助けてと思っけていても、表ではちゃんとすることができず、「大丈夫」と、そっ言っけてしまいます。相手が自分を傷つけ、そして、自分自身も自分を傷つけてしまっていたのです。

でもそんな時、唯一の救いだったのが、他のクラスの友達です。休み時間のたった十分、二十分だったのですが、時間も、イヤなこと全部忘れることができたのです。もっと時間がほしいと思っていました。その一時は本当に幸せて、行動、発言を許される時だったのです。

私が最初に話したのは、地域の人権サークルの先生と違うクラスの友達でした。前に言ったとおり、私は強がりなので、無駄に明るく軽くこっ言いました。

「うち、クラスから嫌われてんねんー。」
と、すると、さっきまで笑っていたみんなが急に真剣な顔をしてこっちを見ただので、少し泣きそっになったのですが、無理やり笑ったのです。そんなのすぐにはれるのに。

そして、話をしていると、涙が込み上げてきました。でも、私は無駄な心配をしていたのです。極力心配はかけたくないと。だから私は必死にこらえていました。すると、一人の先生がこっ言っただのです。

「泣いていいんやで？」

その言葉に私はつまっていたものを一気に流しました。これで何かといっくらいい、なんでもこっ早く言わなかったんだろっ、なんであんな心配を

したんだろっ、そんな思い、今までの思い全てを流しました。

次に話したのはお母さんでした。お母さんもちゃんと聞いてくれました。それからぶっ切れて、毎日恐がって行っていた学校を少しずつ、休むようになって、お母さんは何も言わなくてくれました。

休んだ日の夕方、担任の先生が来て、再度話を聞いてくれ、すこっ心に残る言葉をくれたのです。

「毎日がんばったなあ。」

「耐える必要なんかないで？、君はへんな所で耐えるくせがあるんやから。」

それを聞いて私はまた涙を流しました。人って、こんなあたたかかったけっと思いなから……。

先生は話し合いの時間をつくってくれました。私はふるえる声で自分の思っっていたこと全部話しました。するとみんなが「ごめん」「ごめん」と、言ってくれたのです。話し合いが終わったあと、ごめんと言ってくれたり、しゃべりかけてくれたり。とても喜しかったのです。「あ、クラスってこんな楽しいものなんや」と、その時、いろんな思いをかみしめました。感謝、幸せ、友情、人のあたたかさ。

小学校のころは、人権なんて正直興味ありませんでした。だから、本当に総合とか、大嫌いでした。「きれいごとを並べてるだけやん」とか、関心を持つふりをするだけでした。でもこの出来事を通して、人権とはどういっつものなのか、その大切さを改めて感じました。

いじめ。それは決して軽はずみでやるものではない。それは誰もが分かることです。でも、実際に体験をした私だからこそ、誰よりも強く言えるのです。

私には心を打たれた言葉あります。それは、

「一人に石を投げられたら二人で石を投げ返せ。八人に棒で追われたら十六人で追い返し、そして千人が敵ならば村全てで立ち向かえ。一人が受けた虐めは全員が受けたものと思え、一人の村人のため、全員が結束せよ。」
という言葉です。私は口下手なので、この作文を通してこの言葉を全ての人に伝えたい、そっ思っっています。私が受けたことと同じような嫌がらせを受ける人は、増えてはならないのだから。

「幸せ」

(中学三年生)

私がある日バスに乗っていた時の話です。私は後ろの方の席に一人で座っていました。そして、あるバス停から一人の男の人が乗ってきたのです。するとその人は私の前に座って携帯電話をいじっていた高校生らしき女の子の人に「ここで携帯電話を使うのはやめなさい。」と注意したのです。女の人は迷惑そうな顔をして、しびしび携帯電話を鞆にしまいました。この時私は「なんやろこの人、少しくらいええやんか。」と正直思っていました。しばらくすると、あるバス停から一人のおばあさんが乗ってきました。でもその時バスの席は一つも空いていなかったのです。私はこの席を譲ってあげようか迷いました。するとさっきの男の人が「この席どうぞ。」とおばあさんに笑顔で譲ってあげたのです。私はこの光景を見てハツとしました。自分は何を迷っていたのだろう。自分にもできる事があつたんじゃないか。行動できたんじゃないか……。『席を譲らなかつた』それだけのことなのになぜか自分の中ではとても深刻な事に思えたのです。それと同時にさっきまでの自分が恥ずかしくなってきました。「さっき、あの人はあたり前の事を注意しただけなのにそれを馬鹿にした自分は情けない……。」「そつ思いました。あの男の人は特別偉い人でもないけれど、人として、人間として尊ぶべき人なんじゃないかと思えました。私はあの人の善い事をした後の誇らしげな顔は一生忘れません。こんな人がもっと増えたら皆がもっと幸せになれるんじゃないかと思えます。」

私が小学校の頃聞いた、心に残っている話があります。その時の担任の先生は物知りで話し上手だったので皆に人気のある先生でした。その頃は皆の意見の食い違いが多く、小さい喧嘩がよくありました。そんなある日、先生が言ったのです。「人は一人では生きていけない。だから皆で助けあいながら生きていくんだ。人と人が手を繋ぐと『間』という字に見えるだ

ろつ。助けあいながら生きる人のことを、人間というんだよ。そして人間は助けあうことで幸せをかんじることができるとだ。」私はこの話を聞いたとき、心がジーンとしたのを今でも覚えています。

ところであなたは今、「幸せだ」といえますか? 「幸せだ」と答える人はたくさんいると思います。でもその反面「幸せだ」と言えない人がいるのが現実です。クラスの中でもつまらなさそうに教室の隅で本を読んでいる子、裏で陰口を言われている子、皆から無視されている子……。その子達は「幸せだ」といえるのでしょうか。そして、それを見て見ぬふりをしている子、陰口を言っている子、自分には関係ないと無視する子も「幸せだ」といえるのでしょうか。絶対にそれはいえなれないと思います。自分が自分の周りにいる皆が楽しい。嬉しい。この場所にいられて良かった。と思うことができるのが本当の幸せじゃないかと私は思います。

『人権』とは辞書をひくと「人が生来持っている生命・自由・平等などに関する権利。人間がもつ基本的人権」とでてきます。でも私が思つた人権は「一人ひとりが笑顔で幸せになる、幸せになれるように努力することのできる権利。一人ひとりが大切にされる権利」だと思つたのです。だから私は、身の周りの友達と一緒に、一人である子に「おいでよ。」と声をかけたり、差別をしている人に勇気をだして「なあ、それは間違っているんじゃないの?」と言ったりしていきたくと思います。困っている人がいたら自分から話しかけていくことで自分が相手の人にできる事を考えたり行動したりして、周りの人みんなが笑顔でいっぱいになるようにまず、自分自身を変えていきたくと思います。それを私の近くにいる人からどんどん広めていって、私の友達や私の中学校の生徒が。私が住むこの地域の人が。私がいるこの三重県の人々が。私が立っている日本に住む日本人が。そして、私が存在するこの地球に生きる世界中の人々が!自分や他人の人権を大切にし、皆の笑顔が絶えない、『幸せだ』といえる世界にするのが今の私の夢であり、課題であり、大きな目標です。

長島愛生園を訪問して

(高校一年生)

私は、今年の二月二十八日に国立ハンセン病療養所「長島愛生園」を訪問しました。この企画は津市が行っており、私がついていた中学校では平成十九年から毎年一つの活動として取り組まれています。私が愛生園を訪問するのは今回で三回目だったのですが、中学校の人權サークルで様々な活動をしてきたこともあり、卒業する前にもう一度訪問して、また何か新しいことを学んできたいと思いつきました。もう一度自分の目でしっかりと見て、自分の耳でしっかりと聴いて、今後もずっとこの貴重な体験を忘れないでいたいという思いを強く胸に抱きながら、私は愛生園を訪問しました。

愛生園に着くと、まず初めに歴史館に入りました。そこで田村さんという方のお話を聴きました。日本政府がハンセン病患者を隔離したのは、「ハンセン病患者が日本にいたことが『日本の恥』であると考えたからだ」ということを聞いて、私はそんなことよりも日本が隔離政策を行ったこと自体が何よりの『日本の恥』だと思いました。また「ハンセン病になり手足が不自由になると、末しょう神経が侵され痛みを全く感じなくなり、やけどや切り傷をしやすくなるため患部を切り落とすのですが、それを知らない人々は『ハンセン病になると手足が腐り落ちる』と勘違いしてしまいました」と聞き、正しく知るといふことがいかに大切かを改めて感じました。正しい知識があれば、差

別などは生じません。他人を理解するということの大切さが、ひしひしと伝わってきました。

次に、歴史館に展示されているものを見ました。歴史館には、長島愛生園の大きな模型が展示されています。その模型には、赤い線が引かれています。実はその赤い線は、線から右側が患者地帯、左側が職員地帯と区分するものだったのです。つまり、差別・隔離を意味します。今は自由に行き来できますが、そのことを知ったとき、信じられない思いがしました。そして、もう一つ気になったのが、岡山県議会議員選挙のときに使われた投票箱です。見るからに普通の投票箱ではありませんでした。なんと、全面にたくさんの穴が開いていたのです。これは、入所者の人が投票した中の投票用紙を、蒸気で消毒するためには開けられた穴だそうです。私はそこまでののかと思いました。知れば知るほど知らなかった現実が見えてきて、それと同時に言葉にしようのない怒りが立ち込めてきました。

次に、現在も入所されている川北さんという方からお話を聴きました。ハンセン病はすでに完治していても、差別されたことは六十年近く経った今も忘れられないと語っておられました。また、「人間回復の橋」とも呼ばれる邑久長島大橋が開通した時に、テレビのニュースで町の人が「あんな所に橋をかけて！きたない人がぞろぞろ出てくるじゃないか！」と言っているのを聞いたと話してくださいました。私はこの話を聴いて、非常に腹が立ちました。隔離する必要のない証、人間回復の証として架けられた橋なのに、それでは何のためにこの橋

は架けられたのでしょうか。この橋に込められた人々の願いや想いを、もっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。

ハンセン病は、治る病気です。感染力は非常に弱く、当時愛生園でハンセン病患者の看護をしていた人で感染した人は誰一人いませぬ。それなのに「うつる病気」と言われ「らい予防法」という法律がつくられ、警察による消毒・強制収容などが行われました。そういった間違った政策が人々に「こわい病気」というイメージを植えつけてしまったのです。また、国は八十九年にわたり「絶対隔離患者絶滅政策」を実施し、強制収容・強制労働・断種・中絶・監禁などの人権侵害、じゅうりんが、隔絶された療養所内で行われました。私たちの国である日本が行ったこの誤った政策をなかつたことにはなりません。

もうハンセン病の「隔離」はなくなつたといえ、それは日本だけでなく、中国では今でもハンセン病が怖い病気だと言われています。北京オリンピックの時には、ハンセン病患者は立入禁止とされました。その後、日本人たちの反対によって取り消されましたが、中国側は「病気は治るといっても菌が死ぬだけで、後遺症はずっと残る。後遺症は治らないんだ。とても怖い病気だ」と言っていたそうです。だから、世界的に見るとハンセン病の「隔離」がなくなつたとはいえませぬ。また、どちらの国にも共通して、「差別」は根強く残っています。

ハンセン病の後遺症は「差別を忘れてはならない」というメッセージのように思います。また、「こつでもしないとなくならないと思う」だから」という理由によりハンセン病患者を隔離しても、人間じゃな

くなる訳ではないし、存在が消える訳でもありません。

今回の経験を通して、私たちがこのような事実を学習するということはとても大切であると同時に、これからの社会を生きていく人間として人権学習をすることが必要とされていると痛感しました。差別は私たち人間がつくつたものですから、人間の手でなくしていかなければなりません。私たちにできることは、正しいことを知り、周りの人たちに正しく伝えていくことです。私は、今自分にできる「知る」「伝える」ということを、これからも続けていきたいです。

標語

〈小学生の部〉

見てるだけ いじめることと 同じこと

(五年生)

心の雨 きみの一言 晴れにする

(五年生)

あなたは私の大切な人 私もだれかの大切な人

(五年生)

言わないよ 人に言われて いやなこと

(五年生)

ひとりじゃない ぜったい 仲間がそばにいる

(五年生)

やめよう差別 ふやそう笑顔

(五年生)

ふやそうよ みんなでいっしょに えがおのわ

(六年生)

「差別だめ。」 言葉だけでは変わらない

(六年生)

他人事 それじゃあ 差別は なくせない

(六年生)

わたしから 広めていこう 笑顔の輪

(六年生)

〈中学生の部〉

メールじゃなくて 直接話そう

(二年生)

うばわない なかまの笑顔と 人権を

(二年生)

変わろうよ 見て見ぬふりしてた 自分から

(二年生)

やさしさに 返す言葉は ありがとう

(三年生)

気づくこと それは行動へ移す スタートライン

(三年生)

〈高校生の部〉

見ないふり 軽い気持ちが重い罪

(一年生)

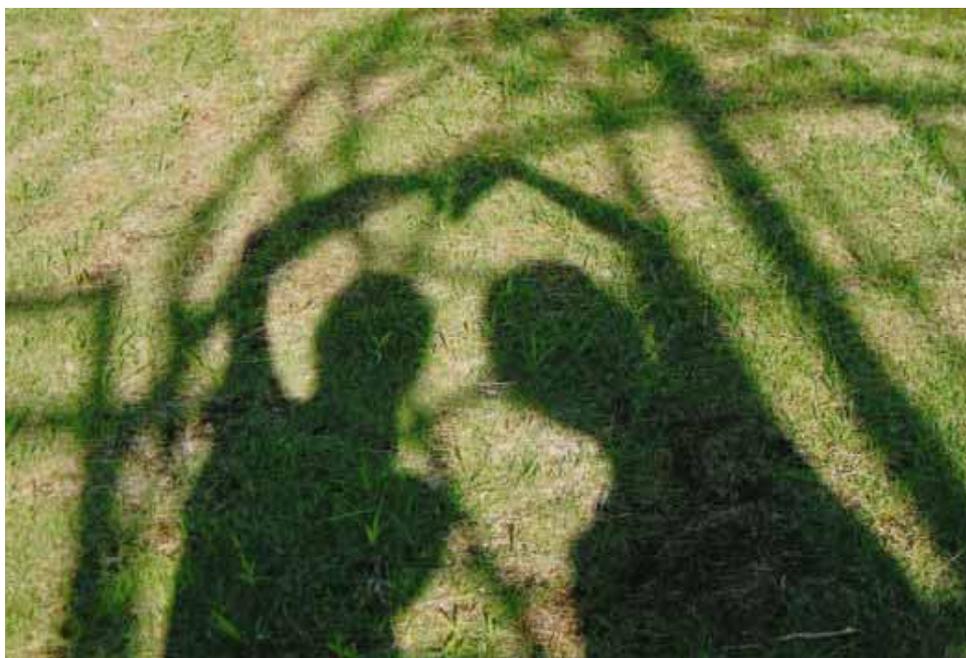
認めあう それが仲間の 第1歩

(一年生)



タイトル：手をつないで

コメント：2人で力を合わせてゴールまで。このとき2人の中には確かな友情と協力する大切さを知る心が生まれたことでしょう。



タイトル：絆

コメント：知り合ってからもう8年。これからも“絆”を深め合っていけたらいいね。



タイトル：旧友とともに

コメント：友人と歩く姿は、とてもあたたかみがあったので撮らしてもらいました。また、長い石段はまるで人生のようにも思います。

人権作品応募状況

作 文		図画・ポスター		標 語		フォト(写真)		作品総数
小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	高等学校	高等学校・一般	
・	・	・	・	・	・	・	・	・
六二点	一三点	一〇五点	五〇点	九七点	四九点	二六〇点	二六点	六六五点



—人権作品集—

2010年2月発行

名 張 市

名張市教育委員会

この冊子は再生紙を使用しています。